

古典文学の名作

古事記

おのやすまろ  
太安万侶



(景行天皇 望郷の歌)

そこより出でまして、能煩野に至りし時に、国を偲ひて、歌ひて言はく、

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しづるはこ

(倭建命が)そこからさらに進んでいらつしやつて、能煩野に着いた時

に、故郷(大和)を懐かしんで、歌つて言うには、

大和はすばらしい国だ。重なり合う青い垣根をめぐらしたような山々、その山々に囲まれている大和は、美しい。

また、歌ひて言はく、

命の 全けむ人は たたみこも 平群の山の 熊櫪が葉を 鬢華に挿せ  
その子

また、歌つて言うには、

(私と違って)命の無事な人たちは、(たたみこも)平群の山の大きな櫪の木の葉を、髪に挿すといい。お前たちよ。

この歌は、国徳こくとくひ歌うたぞ。

また、歌ひて言はく、

愛はしけやし 我家わがへのかたよ 雲居くもゐ立ち来たも

これは、片歌かたうたぞ。

この二首の歌は「国徳こくとくい歌うた」（望郷ぼうきやうの歌）である。

また歌って言うには、

懐なつかしいよ。わが家のほうから雲くもがこちうに湧わき上がってくることだ。

これは「片歌かたうた」である。

この時に、御病みやまひ、いとこはかなり。しかくして、御歌みうたに言はく、

乙女おとめの 床とこの辺へに 我わが置きし 剣けんの太刀たち その太刀はや

この時、ご病状が急変して危篤きとくになった。そうして、お詠よみになったその歌は、

乙女おとめ（美夜受比売みやずひめ）の床とこのそばに、私が置いたままにした太刀たち（草那芸くさなぎの剣）、  
ああその太刀よ。

歌ひ終はりて、すなはち、崩<sup>さ</sup>りましき。しかくして、駅<sup>はゆま</sup>の使<sup>たてまつ</sup>ひを奉<sup>たてまつ</sup>りき。

歌ひ終わるやいなや、お亡<sup>な</sup>くなりになってしまった。そこで、早馬<sup>きゅうし</sup>の急使<sup>きゅうし</sup>を大和<sup>おほ</sup>にお遣<sup>つか</sup>わし申しあげた。



やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。(仮名序)

日本の歌は、人の心を種にして（生い茂り）、無数の言の葉になったものである。世の中に生きている人は、関わる事柄が多いものなので、心に思うことを、見るものや聞くものに託して、（歌として）表現しているのだ。花に鳴く鶯や、水に住む蛙の声を聞くと、生きているものは全て、歌を詠まないということがあるだろうか。

力ちからをも入れいずして、天地あめつちを動かし、目に見えぬ鬼神おにがみをも、あはれと思はせ、  
男女をとこをんなの中をも和やはらげ、猛たけき武士もののふの心をも慰なぐさむるは、歌なり。

力ちからをも入れいずしに、天地あめつち（の神々）を感動させ、目に見えない鬼神きしんをも、「ああ」  
と思わせ、男女の仲をも親しくさせ、勇ましい武士の心をも楽しくなるように  
するのは、歌である。

土佐日記

紀實之



男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

その年の師走の二十日めまり一日の日の戌の時に門出す。そのよし、い  
ささか物に書きしへ。

男も書くと聞いている日記というものを、女である私（も書いてみようと  
思って書くのである。

ある年の、十二月二十一日の戌の時（午後八時頃）に、門出する。その様子  
を、少しばかり、物に書きしける。

ある人、あがた 県の四年五年果てて、例のことも皆みなし終へて、解由げゆなど取りて、  
住む館たちより出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。  
年ごろよく比べつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつづ  
ののしるうちに、夜更よふけぬ。

ある人（貫之）が、任国（土佐の国）での四、五年の任期が終わって、国司  
交代時の公務引き継つぎの通例の事務を皆すませて、解由状などを受け取って、  
住んでいた国司の官舎から出て、船に乗ることになっている所へ移る。あの人  
この人、知っている人も知らない人も見送りをする。（中でも）長年親しく交  
際してきた人々は、別れがたく思つて、一日中、あれこれしては大騒さわぎするう  
ちに、夜が更けてしまった。

二十二日に、「和泉の国まで。」と、平らかに願立つ。藤原のときぎね、船路なれど、馬のはなむけす。上、中、下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにてあぢね合入り。

二十二日に、「和泉の国までは、無事であるように。」と、神仏に願をかける。藤原のときぎねが、船路（の旅）であるのに、「馬のはなむけ」（送別の宴）をする。身分の上・中・下関係なく、皆すっかり酔っぱらって、たいそう奇妙なことに（もの腐るはずのない）塩分のきいた海のほとりで、腐った魚が打ち上げられているように（泥酔して）ふだげ合っている。

## 伊勢物語

昔、男、初冠うひかうがりして、奈良の京、春日かすがの里に、しるよしして、狩りにいに行り。その里に、いとなまめいたる女をんなはらから住みけり。この男、かいま見てけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地こころちまどひにけり。

昔、男が、元服して、奈良の都の春日の里に、領地のある関係で鷹狩たかりに行った。その里に、たいそう若々しく美しい姉妹しまいが住んでいた。この男は、(その姉妹を)物の隙間すきまから見てしまった。思いがけず、(こんな)さびれた旧都に、(姉妹が)とても不つりあいな様子でいたので、(男は)心乱れてしまった。

男の、着たりける狩衣かりぎぬの裾すそを切りて、歌を書きて遣やる。その男、忍摺しのぶすりの狩衣をなむ着たりける。

かすが  
わかむらさき  
す  
春日野の若紫わかむらさきの摺り衣すしのぶの乱れ限り知られず

男が、着ていた狩衣の裾を切って、(それに)歌を書いて贈おくる。その男は、忍摺りの狩衣を着ていた。

春日野の若い紫草のように若々しく美しいあなたがたを見て、私の心は、この忍摺りの乱れ模様もようのように、限りもなく心乱れています。

となむ、追ひつきて言ひやりける。しいでおもころきことともや思ひけむ。

陸奥みちのくの忍もぢ摺り誰たれゆゑに乱れ初そめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。

昔人は、かく、いちはやきみやびをなむしける。

と、すぐに歌を贈おくった。事のなりゆきが趣おもむ深いことでも思ったのだろう  
か。

陸奥の忍摺りの乱れ模様のように、あなた以外の誰たれのために、心が乱れ始め  
た私ではないのに（あなたのために、私は心乱れているのです）。

という歌の趣向おもむ（によったの）である。

昔の人は、このように、情熱的で風流なふるまいをしたということだ。

源氏物語

紫式部



いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむ  
ごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

どの帝の御代であったのでしょうか、女御や更衣が大勢お仕えしていらっ  
しゃった中に、それほど高貴な家柄ではないかたで、格別に帝のご寵愛を受  
けていらっしやるかたがいました。

初めより、我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものに貶めそね  
みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。

(宮仕えの) 初めから、自分こそはと自負していらっしやるかたがたは、目  
ざわりなものと蔑み憎みなせる。

前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ  
たまひぬ。いっしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづ  
らかなる児の御容貌なり。

前世でも(お二人の) 宿縁は深かったのだろうか、世にまたとないほど美し  
い、玉のような皇子までがお生まれになった。(帝は) 早く(皇子を見たい)と  
待ち遠しくお思いになって、急いで参内させて御覧になると、めったにないす  
ばらしい御容貌である。

ほうじょうき  
方丈記

かもちちようめい  
鴨長明



行く川の流<sup>ゆ</sup>れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮<sup>う</sup>かぶう  
たかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中に  
ある、人と栖<sup>すみか</sup>と、また、かくのごとし。

流れる川の流<sup>ゆ</sup>れは絶えることなく、それでいて、もとの水ではない。流れの  
よどんでいるところに浮かぶ水の泡<sup>あわ</sup>は、一方では消え、一方では新たにできて、  
いつまでもそのままにいる例はない。この世の中に存在する、人とその住まい  
とが、やはりまた、このようなものである。

玉敷きの都の内に、棟を並べ、豊を争へる、高き賤しき人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは、去年焼けて、今年作れり。

玉を敷きつめたように美しい都の中に、棟を並べ、屋根の高さを競っている、身分の高い人や低い人の住居は、幾代を経ても絶えることがないものであるけれども、これを真実かと調べてみると、昔あった家はほとんどない。あるいは、去年焼けて、今年造ったものだ。

あるいは、大家滅びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕べに生まるる慣らひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

あるものは、大きな家が没落して小さな家となっている。住んでいる人もこれと同じだ。場所も（同じ所で）変わらず、人の数も多いけれど、昔会ったことのある人は、二、三十人の中に、わづかに一人か二人である。朝に（誰かが）死に、夕方に（誰かが）生まれる世の常は、まさしく水の泡に似ているものだ。